

社会学は面白い!!

～ 新町・今出川通行問題を社会学的視点で考える～

阿形ゼミ 2015.1.10発表

公開用資料(2015年12月)

本郷拓実 笠原大弥 佐々木礼緒 松田真依

福間元気 田坂仁寛 鈴木南 二宮悠

森本有紀 高井佳乃子 善家貴大 沢野井惇史

目次

- . 本調査の目的(3)
- . アノミー論(4 ~ 10)
- . アンケート集計結果(11 ~ 15)
- . 分析と考察(16 ~ 27)

本調査の目的

・本調査は身近な現象を社会学の手法を使って分析することによって、我々の専攻である「社会学」というものをより深く理解することを目的とする。

・取り上げる事例は同志社大学のキャンパス間移動に関する問題である。同志社大学では新町キャンパスから今出川キャンパスの迂回方面への移動は上立売通、今出川通への迂回通行が推奨されているしかし、実際には迂回通行はあまり浸透していないという現状がある。この現状をデュルケームが提唱し、マートンが発展させた「アノミー論」をもとにアンケートを用いて分析する。

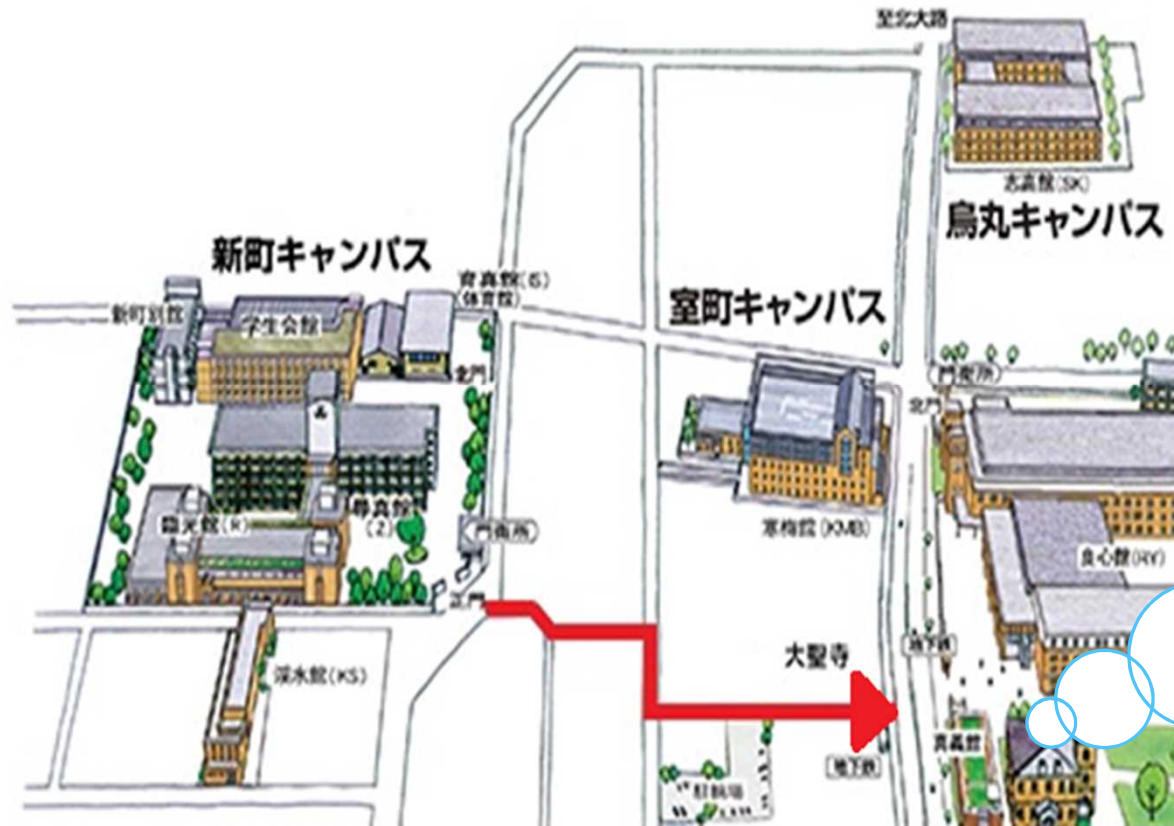
.アノミー論とは？

フランスの社会学者、E.デュルケームによって提唱された。
社会的規範の動揺・弛緩によって生じる欲求の無規制状態。

かみくだくと...

既存のルールの縛りが何らかの要因で緩んでしまい、皆がそのルールを守らなくなり、自分の好き勝手に行動してしまうこと。

新町通行問題におけるアノミー状態の図解



(出典:同志社大学HP)

社会的規範 (赤のルート
を通ってはいけない)
の動揺によって生じる
欲求 (赤のルートを通りたい)
の無規制状態

・ アノミー論について

デュルケームを発展させたマートンのアノミー論では「文化的目標」と「制度的手段」に着目する

・ 文化的目標

時間をかけて形成された、社会の成員が共通して持っている目標

本調査では：

時間を守る、周辺住民の迷惑にならないようにする。

・アノミー論について

・制度的手段

文化的目標を達成するための規範に適合した方法

本調査では：

周辺住民の迷惑にならないようにすることについての制度的手段は迂回通行をすることである。

時間を守る場合も、迂回通行をしなければ、制度的手段にのっとっているとはいえない。

R.K.マートンによるアノミー状態の類型

文化的目標	制度的手段	適応様式	例
+	+	同調	アノミー状態ではない
+	-	革新	成功するために手段を選ばない人
-	+	儀礼主義	目的を持っておらず流されやすい人
-	-	逃避主義	世捨て人

アノミー状態でない。

アノミー状態にある。

+ …… 受容、受け入れている状態。

- …… 拒否、放棄している状態。

. R.K. マートンによるアノミー状態の類型

・同調

文化的目的を持ち、制度的手段を守る。すなわち目的を持ち、ルールを受け入れているのでアノミー状態ではない。

・革新

文化的手段を持っているが制度的手段を拒否する。目的のためには手段を選ばない人(時間を守るために迂回通行をしない)。

. R.K. マートンによるアノミー状態の類型

・儀礼主義

文化的目的を持っていないが制度的手段は守る。とりあえずルールは守る人。

・逃避主義

文化的目標をもたず、制度的手段も守らない。目的もなくルールを破る人。

アンケート概要

属性 :学部、学年、性別

迂回するかどうか (迂回する、しない、どちらともいえないの3択)

迂回するのはなぜか

迂回しないのはなぜか

で「どちらともいえない」と回答した人は の両方に回答してもらった

アンケート集計結果1

< 属性 >

今出川学部*	272人	69.4%
新町学部**	114人	29.1%
京田辺学部***	5人	1.3%

男性	194人	49.5%
女性	197人	50.3%

*神、文、法、経済、商

**社会、政策

***文化情報、生命医科学、グローバル・コミュニケーション

1～2年生	199人	50.8%
3～5年生	191人	48.7%

< 迂回するか >

迂回する	42人	10.7%
迂回しない	217人	55.4%
どちらともいえない	133人	33.9%

(サンプル・サイズは392)

.アンケート集計結果2

迂回するのはなぜか」の選択肢

- 1 . 大学の指導があるから・・・儀礼主義
- 2 . 近隣住民の迷惑になるから・・・同調
- 3 . 迂回しても授業に遅れることはないから・・・同調
- 4 . その他

本調査の分析枠組みに従って分類

.アンケート集計結果3

「迂回しないのはなぜか」の選択肢

- 1 . 授業に遅刻しないようにするため・・・革新
- 2 . 友人が通るから・・・逃避主義
- 3 . 迂回通行について知らなかったから・・・逃避主義
- 4 . その他

本調査の分析枠組みに従って分類

. R.K. マートンによるアノミー状態の類型に当てはめる

文化的目標	制度的手段	適応様式	選択肢
+	+	同調	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣住民の迷惑になるから(迂回する) ・迂回しても授業に遅れないから
+	-	革新	<ul style="list-style-type: none"> ・授業に遅刻しないようにするため(迂回しない)
-	+	儀礼主義	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の指導があるから(迂回する)
-	-	逃避主義	<ul style="list-style-type: none"> ・友人が通るから(迂回しない) ・迂回通行について知らなかった

結果の分析

迂回する場合

同調・・・13.4%

儀礼主義・・・5.5%

迂回しない場合

革新・・・43.4%

逃避主義・・・8.8%

- このような結果となり・・・

“革新”にあたる人が
多いことが分かった。

注)「その他」の回答を除いているので全てを足しても100%にはならない。

革新とはどんな人か

- ・「革新タイプ」にあたる人の例

- …手段を選ばずお金を儲ける人

- (お金を儲けることは資本主義社会の文化的目標であるといえる)

- …遅刻しないよう法定速度を超えるスピードで車を運転する人

- (時間を守るという文化的目標を制度的手段なしで達成しようとしている)

分析結果から考えられる仮説

「革新タイプ」にあたる人が多い。



制度的手段を破るに相当する理由がある。



その理由として、キャンパス間移動の所要時間の長さが考えられる。



「現在の休み時間が少ない」という意識(それが事実かどうかは別として)が学生にあり、それが「迂回しない」という行動に結びついているのではないか。

面白い分析結果

調査を通じて他にもおもしろい事実が判明した。

…学年ごとの類型の割合

	同調	儀礼主義	革新	逃避主義	その他
1年生	8.1%	5.1%	43.4%	12.1%	31.3%
2年生	13.2%	1.7%	48.3%	6.9%	29.9%
3年生	11.7%	9.2%	42.3%	7.4%	29.4%
4年生	23.8%	6.0%	35.7%	10.7%	23.8%

注)5年生は4年生として分類

.面白い分析結果

4年生では「革新タイプ」が減少し、「同調タイプ」が多いことがわかる

なぜこのような結果が出るのだろうか？（仮説）

「同調タイプ」の人・・・文化的目標を受容し、制度的手段を守る人

→就職活動を通して、社会人としての規範が芽生え始めているのではないだろうか

.面白い分析結果

・性別による類型の割合

	同調	革新	儀礼主義	逃避主義	その他
女性	14.1%	50.4%	5.7%	6.5%	23.3%
男性	12.7%	36.3%	5.0%	11.2%	34.7%

面白い分析結果

女性の方が「革新タイプ」が多いことがわかる

- ・なぜこのような結果が出るのだろうか(仮説)
 - 動きにくい靴を履いているなど、女性の方が速く歩くことができない事情が多く、そのことが文化的目標として時間を守るために迂回通行を難しくしているのではないだろうか

面白い分析結果

・キャンパスごとの類型の割合

	同調	革新	儀礼主義	逃避主義	その他
今出川学部	12.4%	44.0%	5.2%	10.3%	28.2%
新町学部	15.8%	43.0%	5.5%	6.1%	29.7%

注) 今出川学部とは神学部、文学部、法学部、経済学部、商学部を指す
新町学部とは社会学部、政策学部を指す

面白い分析結果

今出川学部と新町学部との間で差がみられない。

・なぜこのような結果が出るのだろうか(仮説)

→新町学部生の方が多くキャンパス間移動をされると考えられるので、また、直接注意される機会が多いので(新町キャンパス正門前で迂回ルートを通るように指導している)今出川学部生との差が出ると予想していたが予想に反し、大きな差はなかった。

学生全体では革新タイプが多く、現行の指導体制ではあまり効果が出ていないのではないだろうか。

通行問題の考察を通じて

このように身近な現象を



社会学というツールを使って深く調べる



様々な細かい事象が取り出せる！



新しい論点が生まれ更に深い考察も可能になる



だから社会学は面白い！！！！

アンケート 「その他」について

アンケートにおける「その他」の選択肢の扱いに関して

本来は「その他」も内容に応じて、各類型に当てはめるべきですが、今回は時間的限界から断念しました。

本発表では、「その他」の回答を捨象してもしなくても分析結果が変わらないものを発表に使用しています。

参考文献

R.K.マートン 森東吾 ほか 訳(1961) 『社会理論と社会構造』
みすず書房

E.デュルケーム 井伊玄太郎 訳 (1989) 『社会分業論(上・下)』
講談社学術文庫